

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 フォークナー 『熊』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 55 回のツイキャス読書会の課題図書は、フォークナーの『熊』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『熊』 感想文

私は、森の主のような熊のオールド・ベンをやっつけてしまって本当に良かったのかなと思いました。

オールド・ベンをやっつける為に、毎年、毎年キャンプなどしながら皆で狩りにでかけていたんだけど、生活のためでなくスポーツとして楽しんでいたような所もあって、オールド・ベンを永久に追いつけるという感じのほうが良かったのになと思いました。

確かに、畑や家畜の被害はあったかもしれないけれど、それも本当に熊の仕業かも疑わしいし、それに動物の森に人間が入り込んできた事にも原因はあると思えるし、人が襲われたりするような深刻な様子が感じられなかったので少し残念に思いました。

ライオンは、オールド・ベンをやっつける為に存在するようなものだけど、ブーンはライオンを失いたくなかったように感じました。

熊にナイフを持って股がったのもライオンを助けたかったように私は思いました。

印象に残った文章は

『何かの終りのはじまりだった。』です。それは、何なのか分かりませんが、なんとなくオールド・ベンとライオンとサムが無くなったからかな？と思いました。最初に書いていた純血で不屈の血というのはどういう事なのか分かりませんでした。

(おわり)

「偶然ですが…」

出来事の記述が少年の年齢順に書かれていなかったもので、解説や「むかしの人々」を読んでつなぎ合わせてはみましたが、少年が何をし、何を思ったかを理解するのに とても時間がかかりました。

この話の大きなテーマは、「少年の成長」と「自然と人間の共生」ではないかと思います。私は、「自然と人間の共生」について感想を書くことにしました。

私は、偶然ですが、今年の4月から地域のサークル「自然学園」に参加して月に1～2回ぐらい基礎的な講義を聞き、その後で近くの公園に行って探索する学習をしています。元々自然に関心が大きくあったわけではなく、体が少し弱いので健康のために「入門コース」に入ったのですが、驚くことがたくさんありました。「学園」では、身近な雑草、里山の役割、樹木やキノコ、昆虫、野鳥の基礎知識、植物連鎖、などを教えて頂きました。そして、これらを学習したことで、自然の中で生きる生物の知恵とたくましさ感動し、人間が自分たちの生活のため、生き物に与えている被害を知りました。

だから、この話を読んで、少年が自然を偉大に感じ愛する気持ちがよく分かりました。

また、「共生」という点では、人種の共生「インディアン、白人、黒人」も含まれていると思いました。各人種を尊重することの大切さも作者は述べているように思います。

(おわり)

「ノイズの中で忘れたもの」

「…森は彼が入り込んだとたんに背後で閉じてしまう…進むにつれてちょっと彼を受け入れて開き、開かれた先へ進む後ろでまた閉じてしまう… あたりにただよう液状の大気にゆっくり押し流されているかのようだ…」

(岩波文庫 P16 引用)

この小説は 映像が頭の中に浮かんでくる小説だった。森の湿気や匂いも肌で感じるようだった。私は少年と一緒に森を歩き、少年と一緒に熊と対面したような気持ちになりどんどん読み進めていった。

少年アイクは森の学校で熊狩りを通して精神的に成長していく。少年にとって熊と会うことは、サムの教えを引き継ぎ、次の時代を生きてくために課せられた学びの必須項目だった。そして熊に出会い、少年は大人顔負けのハンターに成長した。

私はこの小説を通して印象に残ったことは、黒人や白人、インディアンもなく人種や社会的立場を超えてハンターとしての連帯感や個人の尊厳が感じられたことだ。

自然の中では、階級や差別、言い訳も通用しない。もっとも残酷でもっとも平等だと思った。

そして少年が自然の中で学んだ事は狩猟によってただ奪う事ではなく、自然に対する畏怖の念、自分はちっぽけな存在であるという謙虚さだった。

では、現代に暮らす私達はすっかり忘れてしまったのだろうか？

そうではない。私達日本人は人間の無力さを知っている。3.11 のあの地震を通して抗う事のできない自然の脅威を経験しているのだ。そうであったはずなのに、私は日常の雑務に流され大切な学びを置いたままにしてしまっていた。少年が学んだ畏怖と謙虚さを。

森の中でハンターは耳を澄まし、目を凝らす。感覚がとぎすまされていく。雑音が多いメンフィスの街とは対照的だ。そして私が暮らす都会とも。文明は人としての進化なのか退化なのかわからなくなってしまった。

(おわり)

『 時計と磁石 』

少年アイクは、ひとりぼっちの森の中で、時計と磁石を置いた。何の目印もない森の中で、それらを手放すことは到底できない。でも、アイクはわかっていた。狩人だとの驕りを捨てて謙虚な心にならねば、あの大熊に出会えないことを。時計と磁石だけではなく、銃まで捨てて、完全に丸腰だ。でも、サムของ教えと訓練を実行して、大熊に出会うことができた。丸腰という私の考えがいけないのかもしれない。大熊も人間も大犬も、森という「自然」の中では同列だ。だから、大熊は銃を持たないアイクを襲わない。

この物語は、「死」にありふれている。現代の私にとっては、「死」は特別なものであり、喪失であり、できれば遭遇したくないものだ。でも、なぜかこの物語のオールド・ベンやライオン、サムの死からは必然性しか感じない。だから、読んでいても「死」への特別感はなく、すんなりと受け入れられた。これは、森という舞台装置からだろうか？

私自身、まだ身近な人間の死を看取った経験はない。唯一、長年飼っていた猫の死を目の前で看取ったくらいだ。それでも悲しくて、ペット葬儀社で葬式と火葬をして、骨を拾った。この物語と比較すると、なんと自然に反していたことか。「死」を特別視して受け入れられない結果だった。

この物語の森は、どれだけの死者を受け入れてきたのだろう。「受け入れる」という考えも違うのかもしれない。たぶん、「死」と森が同化しているのだ。だから、森は森として悠久に存在するのだろう。アイクは、大熊やサムの死を通して、それを無意識のうちに理解したように感じた。

この物語に触れて、私自身数多くの「時計と磁石」を持ちすぎているのだと身に沁みた。

持ちすぎていると、謙虚さから遠ざかってしまう。しかし、「自然」も「死」も特別なものとする現代生活を否定はしないし、その文化も大切だと思う。ただ、現実には人間は自然の一部で、死も自分自身も連綿と続く流れのひとつだと思いつくのも大事なことだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「私たちの国も敗けたのであり、私も敗戦の味を知るものです……」

(引用はじめ)

両者が時間のはじまる以前の暗い影の中にいるのだ、死を越えた存在である大熊と不死の存在を少し知りだした彼とがいるのだ。

(引用おわり)

この意志は、時間のはじまる以前の暗い影の中に、力(スカラー)としてあった。

この森は、意志の表象としてある。誰の意志だろう？

オールド・ベンの意志、ライオンの意志、サム・ファーザーズの意志、ブーン・ホガンベックの意志、先住民のインディアンの意志、そして、サムからイニシエーションを受けた、少年の意志。

彼らの意志が、ひとまとめになって、偶然にもこの世に一つの光源として現れ、OHP に当たって映し出している映像のように、この神秘的な森を表象したのだ。

読者は、その森の時間と空間を共有している。

カーソン・マッカラーズではないが、少年は『結婚式のメンバー』ではなく『伝説の大熊を狩るメンバー』である。

この少年が、森のなかで学んだのは勇気だけではない。

この世界に現象化する自分自身の意志を、目の当たりにしたのだ。

やがて、この神秘の森は、製材工場によって、ただの森に、世界中の、どこの森とも一緒の平凡な森になっていく。

日本にもかつて、このような神秘的な森があった。

しかし、製材工場によって、北軍によって、産業資本の自己増殖によって、神秘性を奪われて今に至る。

1955年、善光寺の入り口にある五明館を訪れたフォークナーは

『私たちの国も敗けたのであり、私も敗戦の味を知るものです……』と語って、訳者を困惑させた。

敗戦によって失ったのは、我々の本質としての内なる永続性への確信だ。

戦後の私たちは、現世を漂う浮遊霊のように、輪郭を持たず生きている。

資本の人格的な動きに翻弄されて生きる私たち。残された、意志の表象としての世界は、はかない。

最近では、ジビエといって野生の鹿や猪を狩るのがブームだが、私は、違和感を感じる。

我々は、少年のように、素手で自然に向き合っているのだろうか？

サム・ファーザーズのように、自然の叡智に敬意を払っているだろうか？

無自覚に森に入ることは怖いと思う。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343